



水戸市男女平等参画基本条例の啓発と
男女平等参画社会の形成と促進のために

WAVE 第17号

発行日：平成29年11月30日

発行：特定非営利活動法人

M・I・T・O 21

〒310-0851 水戸市千波508-34

発行責任者：黒澤輝子



佐川千鶴さん

一佐川文庫 を訪ねてー

気もち良く手入れされた緑の眩しい庭園の中に建つ佐川文庫を初夏の午後、会員と共に訪ねました。瀟洒な落ち着いた外観の図書館です。
館長の佐川千鶴さんに案内していただきました。

館内には1984年から9年間水戸市長を務めた佐川一信氏をリアルに思い起こすことが出来る資料など大切に展示されていました。

佐川文庫は2000年に蔵書3万冊・CD1万枚からスタートし、その後少しずつ増やして現在蔵書6万冊・CD2万枚幅広いジャンルを有する図書館として今に至り、市民に利用されています。

エントランスホールから書架ゾーンに足を踏み入れると佐川一信氏の思索の源泉になっていたと思われる骨太な書籍が多数並んでいるのが印象的でした。

施政方針演説や議会答弁など自ら書き起こした市長だったと今でも時折話題になりますが、高い理念や政策の哲学を格調高く掲げた元市長の原点が伝わってきます。

また佐川氏は文学のみならず、音楽や芸術にも造詣が深く、市民の真の豊かさのボトムアップの象徴として実現したのが今や水戸のシンボルになっている芸術館です。磯崎新氏の設計と吉田秀和、小澤征爾両氏の招聘は国内有数の芸術館としての地位を築いており、佐川氏の思慮遠謀が実を結んでいます。

一方千鶴さんは図書館業務の傍ら定期的にコンサートを開催して若い演奏家育成に尽力しておられ、その延長上にハケ岳の音楽堂を模した佐川文庫音楽堂「木城館(こしろかん)」を開館されました。三代100年以上年輪を刻んだ北山杉の力強く太い柱が客席を囲み、丁寧な造りを感じる「木城館」です。舞台の後ろと横の壁を開けると庭園の風景が表れ、音色と一体となって興を添えるとのことでした。

芸術館が水戸市民の誇りであるように「佐川文庫」と「木城館」もまた然りです。文化の発信基地として深い思いを形にされた佐川千鶴さんの強い熱意と力量に脱帽でした。そして活字離れが言われる昨今ですが、これからも市民的好奇心を満足させる「佐川文庫」であり続けてほしいと思いました。

帰途ゲートを出ると緑の田園風景の向うに筑波の山並みが広がっていました。（田山和子：記）

=目次=

—佐川文庫を訪ねて— ……1頁

好きなことをあきらめない ……2頁

ヒューマンライフシンポジウム 2017

古市憲さんとのエピソード ……3頁

報告・全国男女共同参画会議、

気になる本棚、編集後記 ……4頁



田園の中に佇む佐川文庫・木城館

水戸市男女平等参画月間事業

…お話と朗読… 平成 29 年 9 月 13 日(水)

「好きなことをあきらめない」～時代を強くしなやかに～



中澤 敦子(なかざわあつこ)氏

朝のひとときを温かい雰囲気に包んでくれる朝ドラ「ひよっこ」に合わせ茨城弁を指導された今、時の人=中澤敦子さん(女優 NHK 朝の「ひよっこ」方言指導士)をお迎えして苦勞話又撮影中のエピソード等を交え思い出しながら、楽しそうにお話し下さいました。

仕事は標準語で書かれた台本直しから始まり、台本のセリフを茨城弁に直す。地域によって言い回しは異なるが、分かりやすい方言を心がけたとのこと。「イントネーションと濁音が命」その鉄則を守りつつ、役柄に合った茨城弁を中心に、主演のみね子には、やさしく可愛らしく、男性陣は素朴で少し癖の強い茨城弁を指導してきたとおっしゃいます。約 40 年の方言指導のキャリアを支えるのは俳優としての顔なのでしょうか。日本大学芸術学部卒業後、劇団に入団し数々のドラマにも出演。「方言指導士として、数々の撮影に携われた」「言いたいことは言っちゃう性格」と自認するよう、少しでも気になることがあれば口をはさみ、リアルな番組制作に貢献してきたとのことです。強くしなやかに生き抜き、演劇活動の中で、そして人ととのつながりの中で、ドラマの制作に関わってきた日々を滑らかな口調で話されました。

「ひよっこ」のドラマも終盤にかかると方言はあまり出なくなり、それが何かしら温かい作品になってきていたのではないでしょうか。この作品はいばらきの原点がたくさん描写されており、出演者の人々とみんなで作り上げた、まさに人との出会いが素晴らしいドラマを作り上げたのです。「茨城弁はいい言葉だね」と言われて、心が熱くなったことを語り、皆さんもどうぞ「茨城を誇りに」どんどん前に出ていくことをしてくださいとおっしゃいました。中澤さんは劇団員であった当時、毎晩のように銀座の歌声酒場「ルーブル」で歌っていたことから、現在はびよんど近くでシャンソンカフェ「ルーブル」を出店し、歌声を披露しておられます。今回は「朗読とシャンソン」、そして最後に発声練習「あえいうえおあお」をみんなでやり、楽しい午後のひとときを過ごさせていただきました。

(太田元子:記),

ヒューマンライフシンポジウム 2017

平成 29 年 9 月 30 日(土)

最近はどこの講演会でも同じような傾向にあるが、年々参加者の高齢化が見られ、リピーターが多いのも理由の一つで若者層を引き込むことに頭を悩ませていた。今回、マスコミにも広く活躍されている古市憲寿さんに講演を依頼したところ、快く引き受けていただき、結果として(アンケートから見ると)各年代平均した参加が得られた。特に若い男性の参加者が多かったのが、うれしいかぎりです。 講演内容は、裏方に徹していたので聞くことができずに残念でしたが、アンケートを見ると 80% 近くの参加者に「大変よかったです」「よかったです」との回答を得ています。参加のきっかけも、「テーマ」と「講師」にあるのが 85% と、今後の講師選びにも大きな参考となるでしょう。また、過去のヒューマンライフシンポジウム、男女平等参画課主催の講座等に参加したことがなく、今回が初めてという回答が 65% というのは、講師と内容に期するところが大きいと思われます。 今年度より記録集を作成しないことになりましたので、会員の皆さんには講演のダイジェスト版を作成してお届けしたいと思います。

前日準備から開催当日まで大変なご協力に感謝いたします。(兼子千恵子:記)

ヒューマンライフシンポジウム 2017に参加して



社会学者・古市憲寿さんとの面会前後のエピソード

フリーアナウンサー 高木圭二郎
(元茨城放送アナウンサー兼ディレクター・報道記者)

ヒューマンライフシンポジウム 2017 の司会の大役を担当させていただいた。

今年のゲストは社会学者・古市憲寿さんと伺い、私は約 1 カ月前から書籍を読みあさった。古市さんの研究は幅広い。若者論だけでなく、現代思想、社会制度、少子高齢化問題、起業、ポップカルチャーと幅広く論じている。論じる内容は明快で鋭い。王道的な社会学を根幹として、現地調査に基づく記述も多数見られる。開催前、私は主催者側に「古市さんの外見はソフトですが、骨太な社会学者の方です」と伝えていた。

私は古市さんに関する 2 つのキーワードを見出した。「旅人」と「インタビュアー」というキーワードだ。書籍「希望難民ご一行様」では世界一周の船旅・ピースボートの乗船経験を紹介。単行本「誰も戦争を教えてくれなかつた」では国内外の戦争遺構を訪ね、茨城県阿見町の予科練平和祈念館の裏事情も説明。最新刊「大田舎・東京 都バスから見つけた日本」ではバス座席「ちょっとだけ上から目線」でディープな地域史と都市論を展開している。「船旅、バス旅、戦争遺構巡り」と「旅人」のフットワークの軽さが古市さんにはあると推察した。

そして稀有な「インタビュアー」の一面もある。新書「古市くん、社会学を学び直しなさい!!」では著名な社会学者(上野千鶴子氏、宮台真司氏、橋爪大三郎氏、本田由紀氏ら)に対話形式で本質的な質問を重ねている。文庫本「働き方は「自分」で決める」では東京ガールズコレクションの仕掛け人や映画を作った元俳優らのエピソードを紹介。また「SEKAI NO OWARI(セカイノオワリ)」や「ももいろクローバーZ」ら人気ミュージシャンやアイドルとも対談。果てはマンガの主人公の「島耕作」、さらには東京都の小池百合子知事とも企画対談を果たしている。驚くほどのインタビュー実績である。

書籍の表紙やタイトルに踊らされてはいけない。テレビやツイッターの発言に惑わされてはいけない。古市さんは骨太も骨太の社会学者の方だ。私は心してシンポジウム当日を迎えた。打合せはごく短時間。私は書籍を読み通したことを伝え、「古市さんは旅人でインタビュアーですね」と声をかけた。古市さんは笑顔で「読んでくれてありがとうございます」と応じ、今後の研究に関するお話しも伺うことができた。

今回の講演と書籍のリサーチを通じてポイントと感じたのは、少子化対策の遅れ＝日本の先送り体質に関する指摘だ。書籍タイトル化された「保育園義務教育化」など、古市さんは海外で実証済みの具体策も提言している。広く深い知見はさらに共有されるべきと感じた。もっと話を聞きたい、それが私の率直な感想だった。



会場の皆さんと筆者右端

参加報告

平成 29 年度男女共同参画社会づくりに向けての全国会議平成 29 年 6 月 21 日

1999 年 6 月男女共同参画社会基本法が制定され、その月に内閣府男女共同参画局主催の全国会議が東京国際フォーラムで行われ、水戸女性会議のメンバーとともに参加してきた。

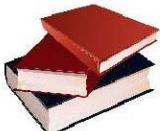
日本女性会議が各自治体持ち回りでその地域の特徴と地元民らのにぎやかさやもてなしに比べ、工夫はないが國の方針、男女共同参画局の進める取り組みを実施している先進事例や活動報告がつぶさに分かる。そして一日にして全国の素晴らしい活動事例や輝く女性の活躍を知ることができた。

基調講演では内閣府特命大臣(男女共同参画)/女性活躍担当大臣、一億総活躍担当、働き方改革担当、再チャレンジ担当、拉致問題担当、(少子化対策、男女共同参画)と長々とたくさんの肩書の要職を務める加藤勝信氏(妻、娘 4 人)の家族を持つ大臣が平成 28 年版のデータを基に解説。資料に目を通せば分かる内容である。

対談は「女性の活躍に向けて」と題し、村上由美子氏(OECD 東京センター所長)と大森美香氏(脚本家) NHK 朝の連続ドラマ「あさが来た」の脚本制作の背景(広岡浅子=日本女子大学設立に奔走した実業家)の話題から、女性ならではの「しなやかに」「したたかに」をベースに、男女が対立関係になるのではなく、多様性と可能性を進め、イノベーション(技術革新)の必要性を力説。大森氏の「男女で一緒に楽しい世界になることを目指して」、村上氏の「母親ならではの視点で、子育ての中から学んだことも生かしてビジネスに役立てる」などが印象に残る。

また女性のチャレンジ賞・支援賞・特別部門賞の表彰団体や企業者・大学などが事例報告、育児支援の中で、出産後の女性の「産後ケア」に焦点を当てる活動プログラムを開発・提供の NPO 法人や限界集落における農業の可能性と価値を広げる活動報告、農村を未来へ繋ぐ活動を発表の女性、大学での女性活躍・女性医師に対する支援協力、環境整備した活動報告の大学の方など 3 人それぞれの実績発表があった。

日本全国各地の都市の取り組みの成果や課題を共に学び合うことも大切なことだが、遠い場所移動と地域間交流に時間を取りられると秋の行事の多い中の参加が難しくなってきてている。今回は東京での会議参加に目的を絞った結果になった。事務局報告



気になる本棚 「女性の活躍」って 朝日新聞 11 月 5 日付 社会学者・詩人水無田気流

★ 「仕事も家庭もの理想と現実」を読み解く書籍を社会学者の記事から紹介したい。

・女性活躍界の世界的エース、米 FB 最高執行責任者のシェリル・サンドバーク『LEAN IN』仕事で成功し、理解ある夫との間に 2 人の子どもがいて…という、絵にかいたようなキャリアウーマンの彼女が説く、タイトル通り、女性が「一歩踏み出す」勇気。子どものころから男性より一步引いた人生を求める女性は、自己評価が低い傾向があり、彼女もかつてはそうだったという。それでも問う。「怖がらなければ何ができる?」と。キャリアは「ジャングルジム」。てっぺんに到達する道は無限…。ウィットに富む言葉の数々は勇気づけられるものばかり…(その後の続編は近刊『OPTION B』(日本経済新聞出版社に)

★トップの経験「その必要ができたとき」、トップを走る女性はどう決断すれば良いか。オバマ政権のヒラリー・クリントン国務長官の下で、女性初の政策企画本部長を務めたアン＝マリー・スローターは、「そのとき」を迎え、政府の要職をあきらめた。その経験を書いた『仕事と家庭は両立できない?』で、サンドバークの主張は分かることながら、生活が破綻した様を綴る。「行っちゃいやあ。アメリカがどうなっても知るもんか!」と息子に呼ばれたりしながら自宅を後にする日々…。

実は子どもは幼い時より思春期の方が大変だ、とスローターは語る。次号へ続く

編集後記 : 毎年秋のヒューマンライフシンポに向けて、全力を傾けてきて、終わると次に何をやつたら…。会員の発意を期待しています。が、女性の活躍推進はシニア層がいくら考えを巡らせても、若い世代を巻き込む企画は当事者のもの、厚労省の働き方改革を実のあるものにしていかなくてはなりません。支援されるより、支援できる立場になりたい。事務局